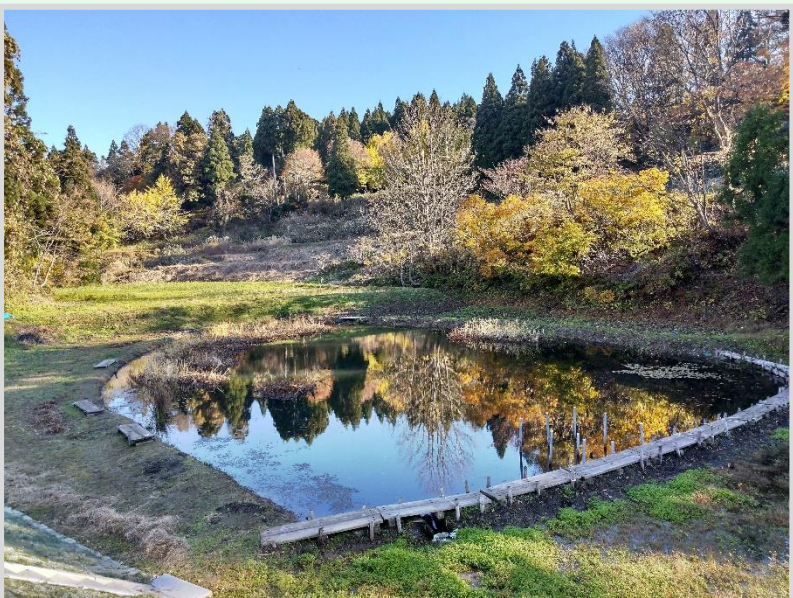


里山の宝箱火打池は、天然のため池を利用したビオトープです。

「ビオトープ」は、ドイツ語のBIO（ビオ：生きもの）とTOP（トープ：場所）の合成語で、本来は「生きものの暮らす場所」という意味です。日本では、都市化の進んだ地域の小学校などに、小さな池や草地など自然に近い場所を人工的に作り出し、地域にいた生きものを呼び戻すタイプのビオトープがよく見られます。

火打池は、このようなビオトープとは少し異なり、もともとあった「生きもの」の暮らす場所を保全していく形のもので、「保全型ビオトープ」と呼ばれることもあります。

自然環境を保全する、ということと土地の造成工事などから守る、というイメージがあるかもしれませんが「自然の猛威からの保全」という考えかたもありま



す。特に、里山の環境は人が長い間自然に働きかけることで維持してきた環境なので、その働きかけがなくなれば里山の環境は変わってしまいます。

火打池とその周辺は、草刈りや水生植物を緩やかに管理をしながら、昔ながらの里山環境を維持することで、誰でも気軽に自然に親しみ、生きものや植物の観察、採集ができる場所となっています。

【火打池の特徴】

火打池には、アメリカザリガニ、ウシガエル、コイ、ブルーギルといった外来生物はいないと思われま

す。そのため、この地域のため池の本来の生態系が今でも維持されていると考えられます。

しかしながら、昔はいたといわれる「タガメ」など、もう見る事ができない生きものもいます。

今、ここにいる生きものたちもちょっとした環境の変化で数を減らし、気づいたときにはいなくなっているかもしれません。そんなことにならないよう、水草とりや草刈りのついでに生きもの



【火打池の植物 ミツガシワ】

初夏には火打池の四分の一を覆ってしまうぐらいの勢いで成長するミツガシワ。本来は亜寒帯性の植物で、氷河時代に生息域拡大し、氷河時代が終わりに暖かくなってきた後も、冷涼な地域には隔離されて生育地が残った「遺存植物」です。

新潟県では「絶滅危惧Ⅱ類」に分類されているので、繊細な植物かと思ったのですが、実は丈夫な植物で繁殖力も旺盛です。増えすぎないように管理するのが大変です。



【火打池の生きもの メダカ】

火打池にはとてもたくさんメダカがいます。野生のメダカは現在貴重なものとなっていて、環境省ではミツガシワ同様「絶滅危惧Ⅱ類」に分類されています。（新潟県では「準絶滅危惧種」です。）

雪どけの時期や台風の時など、火打池は水がオーバーフローするのですが、その後にはできた水たまりにはたくさんメダカが取り残されます。ですが、その死骸をあまり目にするものではないので、鳥や獣たちが食べているものと思われず、食物連鎖ですね。



【編集後記】

以前から発行したいと思っていた火打池通信をようやく発行することができました。お手に取っていただきありがとうございます。第二号の発行時期は未定ですが、できるだけ火打池の魅力をお伝えしていきたいと思えます。なお、内容等に間違いがありましたら、ご指摘いただければ幸いです。

(文責：火打池保存会 廣橋)



<https://hiuchi-ike.net/>